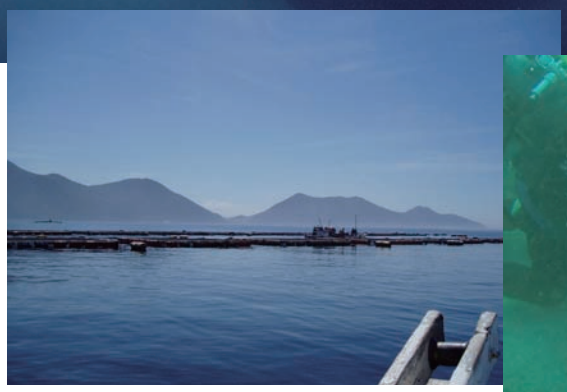
ISSN 0917-8465

日本財団 The Nippon Foundation 助成事業

アジア水中考古学研究所会報号外
2007 年 5 月 1 日 発 行
NEWSLETTER May 2007

海底遺跡ミュージアム構想

2007 年度日本財団助成「海底遺跡見学会の開催と水中考古学の推進」事業



アジア水中考古学研究所

1 構想の目的

海底に存在する貴重な文化遺産の保護と活用は、水中考古学に携わる当団体としての責務であると考える。2001 年にユネスコ総会により採択された水中文化遺産保護条約の趣旨に基づき、海底遺跡の野外ミュージアム化を行うことで公開活用を図り、水中文化遺産の保護と活用に寄与することを目的とする。

MEMO

「水中文化遺産保護条約　水中文化遺産を対象とする活動に関する規則」

第七規則　現地にある水中文化遺産の公開は、このようなアクセスが保護及び管理と両立しない場合を除くほか、促進される。

2 構想の経緯

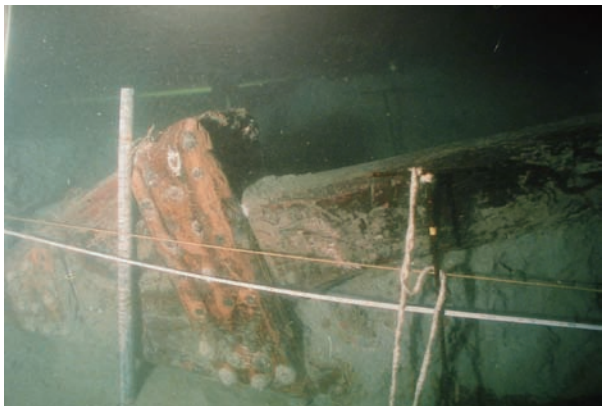
我が国は海洋国家である。海洋に関する関心も決して低くはない。しかし、その関心が海洋全般にわたっているかどうかを考えた時、必ずしもそうではない。海の開発と言えば、海底資源や水産資源などを除いて、埋め立てて陸地化して利用することであった。その開発が時として海底の文化遺産を破壊していることに思いが至ることはほとんどなかった。

当研究所はこうした現状を危惧し、水中文化遺産の保護と調査を目的に 1986 年に設立され、これまで長崎県松浦市の鷹島海底遺跡、長崎市茂木港外遺跡、小値賀町山見沖海底遺跡、前方湾周辺海底遺跡、福岡県玄界島北東海域、芦屋沖海底遺跡など主に北部九州の海域の調査を行ってきた任意団体である。2005 年に NPO 法

海底発掘風景（鷹島海底遺跡）

海底実測風景（鷹島海底遺跡）

海底で発見された元の軍船の部材（鷹島海底遺跡）



海底で発見された元の軍船の碇（鷹島海底遺跡）

復元が進む韓国新安沖沈没船

韓国の海底遺跡調査船

人化し、名称をアジア水中考古学研究所と改めて、現在に至っている。アジアの水中考古学は日本が最も早く行い、リードしていたと言っても過言ではないが、過去 30 年の間に韓国や中国は国家レベルでの支援を受けて発展し、その立場は完全に逆転してしまっている。

本年 11 月、隣国である韓国の木浦では新安沖沈没船発掘 30 周年を記念した国際シンポジウムが開催された。新安沖沈没船の発見は韓国の水中考古学の大きな転機となった。国家レベルでの支援をもとに調査が行われ、発見地に近い木浦に国立海洋遺物展示館が建設され、発見船の復元が進んでいる。今年は独自の調査船 SEAMUSE が進水し、来年には展示館が国立博物館に昇格するという。新安船の発掘の前年、日本の水中考古学にとっても画期的な調査が行われている。北海道の江差沖で沈んだ開陽丸の調査である。同じく 30 年経過した現状を比較する時、我が国と韓国における海底遺跡や水中考古学に対する社会的認知度の差はなんであろう。開陽丸の調査の意義を小さくしてしまい、我が国の水中考古学の発展につなげられなかったことを反省しなければならないし、我々の力量不足もまた痛切に感じる。

韓国の水中考古学は一つの沈没船を契機に始まったが、日本では開陽丸以外にそういった遺跡はなかったのであろうか。急速な国土開発により多くの陸上の遺跡が破壊されたことは周知の事実である。しかし、まだ救われるのは記録保存の名により発掘調査が行われ、その遺跡の一部であっても情報が得られていることである。それに比べて海底の遺跡はどうであろう。そのほとんどが人知れず破壊されている。中近世に港町で栄えた町の多くは近代以降も重要な港湾都市として発展した。そのため、港を埋め立て、海岸線を沖側に大きく追いやることとなった。つまり、海底遺跡が存在した可能性が高い場所ほど破壊の危機にさらされており、すでに破壊されてきた。その責任について考古学関係者や文化財関係者も負わねばならないことは確かであるが、水中考古学そのものが現在の国内の考古学界の中で正当な評価を受けにくいことにもよる。むしろ評価されているのは海外の学界等においてである。鷹島海底遺跡に関するテレビプログラムや学術記事は、国内よりはむしろ海外において作成されたり、公表されたりしている。

国内で正当な評価を受けにくい理由はいくつかあるが、その一つは海底から引き揚げられた文化遺産をオークションによって売却する商業的行為と同一視されている事実がある。あるいは自然地形をあたかも海底神殿であるかのように誤解し、「海底遺跡」として宣伝されることで、水中考古学そのものの見識が疑われている事実もある。これらの行為は水中考古学とは全く別ものであるが、同一視されていることは事実である。

そこで当研究所ではまず本当の遺跡を見せることが必要ではないかと考えた。その上で正当な評価をしてもらおうと考えるのである。こうした試みは海外ではいくつか例が見られる。例えばイタリアのバイア遺跡、エジプトのアレクサンドリア遺跡などである。バイア遺跡などではスキューバダイビングやグラスボトムボートなどを利用して遺跡を見学させている。これまで陸上だけではなく、海底にも遺跡があることを説いてきたが、話として聞くことと実際に見ることでは大きく異なると思う。そして、国内でも一般公開が可能な遺跡が近年、

いくつか調査された。一つは 2001 年と 2004 ～ 2006 年にかけて調査が行われた小値賀島周辺の海底遺跡であり、もう一つは 2005 年に調査が行われた芦屋沖海底遺跡である。前者は数度にわたる調査による海底遺跡を公開する上での適性が確認されている。後者はまだ潜水を行った専門研究者が少なく、適性の判断には至らないが、もともと魚群が豊富なダイビングポイントであったため、年に数回、魚群観察を目的としたツアーが組まれている。

海底遺跡の場合、よい遺跡が必ずしもよい野外ミュージアムになるとは限らない。遺跡の重要度や歴史的意義といった問題の前に安全に見学できる環境がまず第一である。遺物の量や種類を考えると、鷹島海底遺跡の方が野外ミュージアムとして適切である面もあるが、やはり透明度が低いという欠点があった。潜水ツアーガイドをシステム化することができれば、今後は鷹島海底遺跡といった透明度が低い海域の遺跡であっても参加者に厳しい経験資格や条件を設定することで可能になるであろうと考えているが、現状では難しい。そのため、潜水条件に極めて恵まれている小値賀島前方湾海底遺跡と、すでにレジャーダイビングポイントとしても利用されている芦屋沖海底遺跡（もちろん遺跡を見るものではなく、魚群を見学するポイントである）を海底遺跡ミュージアムの候補地として考えた。

近年、水中の文化遺産を取り巻く状況も変わりつつある。2001 年の国際連合教育科学文化機関（いわゆるユネスコ）第 31 回総会において、「水中文化遺産保護条約」が採択された。それは「水中文化遺産」を定義し、その保護を確保し及び強化することを目的とするものである。我が国はまだその締約国とはなっていないが、細部はともかくその趣旨そのものについては国内法である文化財保護法の趣旨とも合致する。

今回の海底遺跡ミュージアム化は初めての試みであり、多くの課題が出てくると思うが、その課題の克服こそ今後の水中文化遺産の保護と活用につながると考える。

MEMO

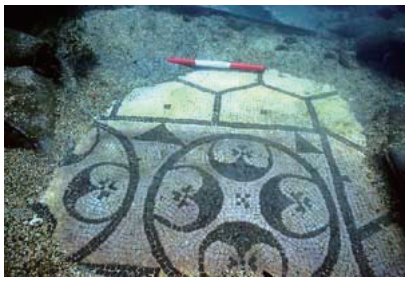
バイア海底遺跡（イタリア）右写真３点

ローマ時代の海底遺跡をそのまま海底で保存し、スキューバダイビングやグラスボトムボート（船底がガラスになったもの）で一般の見学者に見学させている。付近にバイア考古学博物館があり、概説的な説明や引き揚げ遺物の展示説明を行っている。

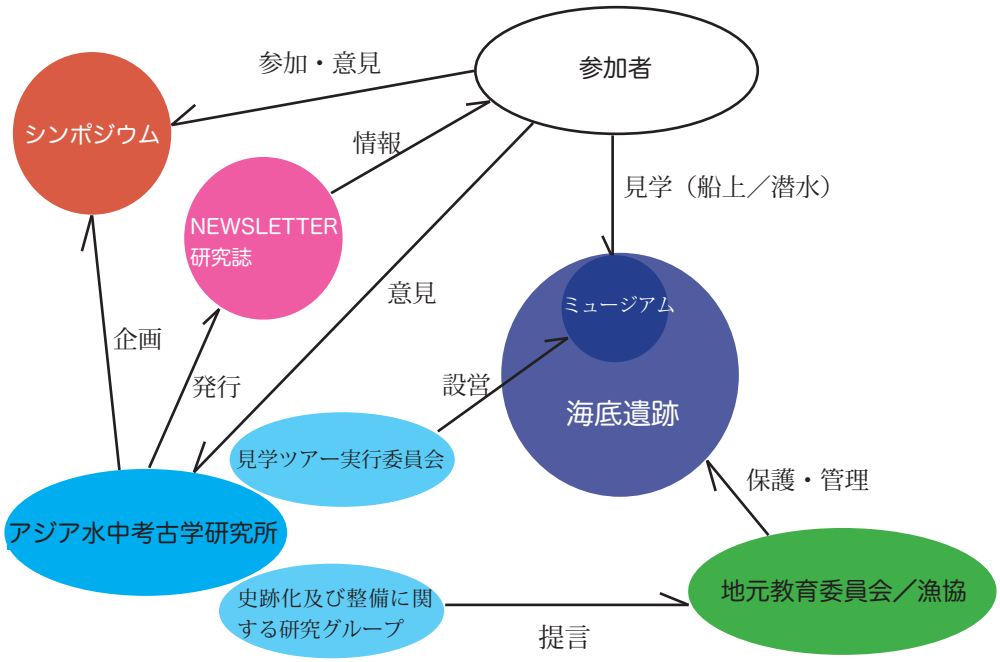
小値賀島海底遺跡でも歴史民俗資料館と海底遺跡をリンクさせて見学してもらいたいと考えており、博物館と遺跡の関係など、参考になる点が多い。

アレクサンドリア海底遺跡（エジプト）

1992 年より、フランス人のフランク・ゴッディオが発掘プロジェクトを発足し、調査が始まった。スフィンクス像や女神像、プトレマイオス王朝時代の王の像やオクタウィアヌスを始めとするローマ皇帝の像、沢山のアンフォラの壷、紀元前 4 世紀頃の沈没船など、貴重な発見が相次いだ。これらの調査から、また、カイト・ベイ付近の海底からは、ファロス灯台の一部と見られる石柱なども発見された。これらの調査で海底から見つかった物のうち、重要なものは引き上げられ、グレコ・ローマン博物館に展示してあるが、その他の遺跡については、現在もアレクサンドリアの沖の海底に残されている。2001 年からは、この地域での潜水が許可されるようになり、一般観光客も直にその目で遺跡を見て、触れられるようになった。



3 構想チャート



4 組　織

実施主体は以下の通りである。海底遺跡見学ツアー事業を実施するにあたって「海底遺跡見学ツアー実行委員会」を設置し、海底遺跡の史跡化や整備計画に関する研究グループを別に設ける。そして、この構想に関わる事務処理は企画担当者が総括する。

実施主体

アジア水中考古学研究所

代表責任者：林田憲三（同研究所理事長）

企画担当者：野上建紀（同研究所副理事長／有田町歴史民俗資料館）

海底遺跡見学ツアー実行委員会

座長：　塚原　博（アジア水中考古学研究所理事／小値賀町教育委員会）

石原　渉（アジア水中考古学研究所副理事長）、横田　浩（同研究所非常勤職員）

林原利明（同研究所理事）、加藤隆也（同研究所会員）、小川光彦（同研究所会員）

真部広紀（同研究所会員）、山本祐司（同研究所会員）、野上建紀

海底遺跡の史跡化及び整備に関する研究グループ

座長：　折尾　学（元福岡市埋蔵文化財センター所長）

林田憲三、石原渉、高野晋司（アジア水中考古学研究所理事）、塩屋勝利（一支國研究会）

西健一郎（九州大学大学院人文科学院）、横山邦継（福岡市教育委員会）、塚原　博

常松幹雄（福岡市埋蔵文化財センター）、宮武正登（佐賀県教育委員会）、野上建紀

オブザーバー：　西谷　正（日本考古学協会会長）、佐々木達夫（金沢大学文学部教授）

5 海底遺跡ミュージアム候補地概要

■1　小値賀島周辺海底遺跡（前方湾海底遺跡・山見沖海底遺跡）2007 年度見学ツアー実施予定地

小値賀島は長崎県の五島列島の北部に位置する島である。小値賀島は伝統的な海人漁が盛んな島である。1992 年に小値賀島の唐見崎半島の沖合から数点の陶器が海から引き揚げられた。それらは 16 世紀末～ 17 世紀初に東南アジアのタイのノイ川流域の窯場で生産されたものであった。この海底遺跡は山見沖海底遺跡と名付けられた。水深はわずか 4 ～ 5m であり、水面からも陶磁器を確認することができる。海底面には今も 1000 点あまりの陶磁器片が散乱している。2001 年に九州・沖縄水中考古学協会が潜水調査を行った。

さらに小値賀島の前方湾は中世の重要な停泊地と推定されており、付近には中世山城も控えている。船の停泊を意味する碇石も発見されており、海底調査に期待がもたれていた。そして、2004 年から 2006 年にかけて、潜水調査が行われた。正式な報告書は 2007 年春に刊行される予定であるが、中国陶磁器、国産陶磁器、国産土器、碇石など中近世の遺物が多数海底及び海底下で発見されている。

小値賀島／山見沖海底遺跡

■2　芦屋沖海底遺跡（オキノセ・ナカテ・コウヤマ）2008 年度見学ツアー実施予定地

1978 年に三里松原海岸に大量の古銭が漂着した。その後も現在に至るまで陶磁器の漂着が続いている。掲載した写真は 2006 年 12 月に打ち上げられた江戸時代の伊万里焼である。このようにほとんど欠けることなく、陶磁器が打ち上げられる。沖合に陶磁器を含んだ積荷が沈んだことは確かであり、実際に海底からも陶磁器が発見されている。

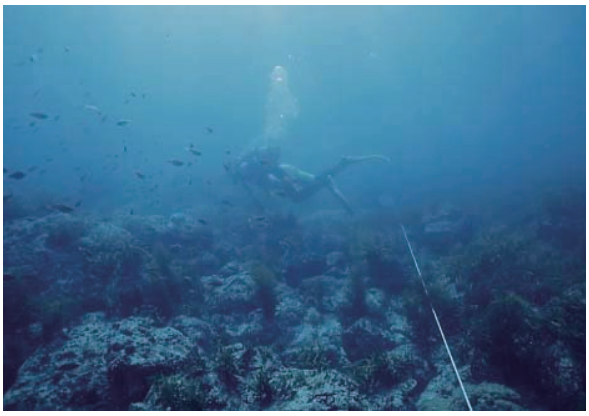
まず 1989 年から 1992 年にかけて北九州市のダイビングショップのオーナーにより発見され、ほぼ同じ海域から 100 点以上の伊万里焼が発見された。その後、2004 年に九州・沖縄水中考古学協会によって潜水調査が行われ、同種の伊万里焼を発見した。現在、これらの陶磁器の多くは芦屋町歴史民俗資料館に寄贈され、展示されている。

もともとダイビングポイントであったところに陶磁器が発見されたため、現在もダイビングポイントとして年に数回レジャーダイビングツアーが行われている。そのため、地元漁協との交渉や船の手配など一から交渉して準備しなくてよいため、見学だけであれば比較的容易に潜れる遺跡である。

三里松原海岸に打ち上げられた伊万里焼

6 2007 年度見学ツアー実施計画（小値賀島周辺海底遺跡）

■1　準備



小値賀島／山見沖海底遺跡

①実行委員会と研究グループ

構想を具体化するために海底遺跡ミュージアム等実行委員会を福岡市で開催する。参加者は海底遺跡見学ツアー実行委員会と海底遺跡の史跡化及び整備に関する研究グループのメンバーである。事前に構想企画担当者より構想（案）を提示し、インターネット上の掲示板で意見をあらかじめ集約した後に最終的な協議を行う場とする。

海底遺跡見学ツアー実行委員会は主に小値賀島周辺海底遺跡の見学ツアーにおける技術面や具体的な方法面について考え、海底遺跡の史跡化及び整備に関する研究グループは小値賀島を含めた海底遺跡の史跡化や整備に関する法律的な問題点や整備理論について検討する。

②事前潜水

小値賀島周辺の前方湾における見学ツアー実施にあたり、事前潜水を行い、見学ツアーコースの決定、必要な案内ガイドの作成を行う。そして、ボンベの充填などを含めたダイビングのバックアップを行う業者と打ち合わせる。また、同時に船上からの遺跡見学方法を決定する。

■2　参加募集

当研究所の Web site で募集を行う。対象は一般である。また、小値賀町民に関しては別途案内を行う。募集人員は 20 名を予定している。船上見学者については特に条件は設けないが、潜水見学希望者については、安全管理上、参加資格を設ける。

■3　計画実行案

2007 年度は小値賀島周辺海底遺跡の見学ツアーを予定している。2008 年度予定の芦屋沖海底遺跡については、2007 年度の事業実績と予備潜水の結果を踏まえて、方法を改めて検討する。

参加者は原則として現地集合、現地解散。ただし、福岡発と佐世保発の最も都合のよい交通手段の紹介は行う。主なサービス内容は、①講座、②ビデオ上映会、③船上による海底遺跡見学、④潜水による海底遺跡見学などである。その他、宿泊地の相談、医療施設の案内などに応じる。

ただし、潜水希望者は C カード所持及び最低潜水経験本数 50 本以上とする。参加費用は実費（タンク代金など）を参加費として徴収するかどうかは未定。

①講座

見学ツアーにあたってのガイダンスを行う。より興味をもって遺跡を見学してもらえるような予備知識を提供するとともに安全な見学ツアーとなるようなレクチャーを行う。海底遺跡そのものの見学だけでツアー参加者を満足させることは難しいと思う。そうした遺跡は陸上であっても少ない。もちろん、その見学自体を充実したものにすることは必要であるが、事前講座を行って、その遺物や遺跡の意味を深く理解してもらうことが重要である。例えば小値賀島周辺には「碇石」が数多く発見されているが、それが本来どういった姿のものであっ

たのか、またそれがどういった意味をもつものなのか、を知っているか、知らないかで大きく印象が異なると思う。海底遺跡の見学ツアーが成功するかどうかは実際は事前レクチャーにかかっていると言っても過言ではない。2006 年 11 月に韓国の新安沖沈没船発掘 30 周年記念の国際シンポジウムに伴い、新安船発見箇所見学ツアーが行われたが、実際の海底を見学するわけではなく、発見海域のクルージングと付近の島の石碑を見学しただけに過ぎなかったが、その前日、前々日に開催されたシンポジウムによって新安沖沈没船に関する知識と意義を理解できていたので、参加者の多くが満足していたと思う。そうなるようなガイダンスを工夫して行いたい。

②ビデオ上映会

当研究所がこれまで行ってきた海底遺跡の水中調査ビデオの上映会を行う。具体的には小値賀島海底遺跡の他、鷹島海底遺跡、茂木港外遺跡などである。ビデオの上映を行いながら、研究所会員が説明を行う。上映後、参加者の感想を述べてもらい、意見を集約する。

③船上による海底遺跡見学

チャーター船上から海底遺跡の見学を行う。水深 5 m 以内の山見沖海底遺跡などは水面からの観察が十分可能である。また、唐見崎付近では海底で折れた碇石の観察も可能である。

現在、見学方法は四通り考えられる。一つめはいわゆる「箱眼鏡」である。船ベリから半身を乗り出して「箱眼鏡」を通して見る方法である。二つめは救命具等の安全確保を行った上で水面に浮かび、水中マスク等で海底を観察する方法である。三つめはいわゆるグラスボトムボートの使用である。この方法が最も理想的であるが、経費的な問題で難しく、今回はその方法は見送ることにする。「箱眼鏡」で行うか、「水中マスク」で行うかは、事前潜水を行った時に決定する。また、水面から観察できない水深の遺跡については、水中ケーブルテレビの使用ができないか、事前潜水時に確認する。経費的に可能であれば、安全管理上も有効であるので積極的に使用する。

その他、前方湾や周辺の海域をクルージングし、船上で小値賀町歴史民俗資料館の学芸員による史跡解説を行う。

歴史民俗資料館内展示（山見沖海底遺跡出土品）

前方湾海底遺跡の碇石

復元された「木碇」（福岡市埋蔵文化財センター）

バイア海底遺跡における船上説明とグラスボトムボート

④潜水による海底遺跡見学

スキューバダイビングによって、実際の海底遺跡を見学する。観察できる遺物は陶磁器と碇石である。時代は中世から近世にかけてである。また、遺跡地内にはまだ遺物が散在している可能性が高いので、新たに発見された遺物の観察も可能であろうと思われる。

a）まず港の浮き桟橋よりチャーターした船で出港する。潜水海域は数分で到着する。潜水開始ポイントにアンカーを打ち、停泊させる。

b）停泊後、潜水前に通常のレジャーダイビングと同様にインストラクターによる説明とバディ同士の打ち合わせを行う。

c）潜降・浮上ロープを設置し、そのロープを利用して潜降・浮上を行う。海底にはガイドロープを設定し、ガイドロープに沿って海底では移動する。

潜水は 30 分～ 50 分の間の無減圧潜水を予定。１回の潜水人数は、ダイビングのインストラクター（プロダイバー）２名、遺跡説明ガイド２～３名（当研究所会員）、見学参加者６名ないし８名とする。

潜水の安全管理は船上の監視員１名と海中のインストラクター２名で主に行い、遺跡説明ガイドがそれをフォローする。見学参加者は二人一組のバディシステムをとり、緊急時は二人一組でインストラクター１名とともに浮上する。

海底における遺跡や遺物の説明は、あらかじめ海底に設置した説明板の他、水中ノートや水中伝言板を使用してコミュニケーションを図る。

■４　日程（案）

①②③④の内容について、日程案を提示する。ただし、参加者人数の潜水希望者の割合により、変更あり。

（第１日）

午前：小値賀町歴史民俗資料館見学

水中考古学及び歴史講座（題目・講師とも仮案）

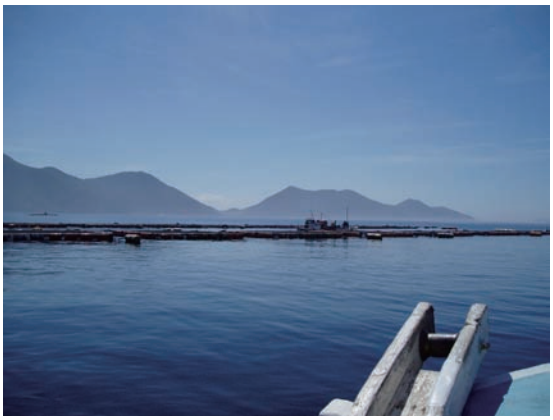
9：00 － 9：30	水中考古学入門（講師：林田憲三）
9：30 － 9：50	小値賀島史（講師：塚原博）
10：00 － 10：20	小値賀島の碇石と陶磁器（講師：小川光彦）
10：40 － 11：00	山見沖海底遺跡とアジア貿易（講師：野上建紀）
11：10 － 12：00	参加者自己紹介、見学ツアー説明、安全に関する注意事項説明

午後：船上からの海底遺跡見学（山見沖海底遺跡、唐見崎碇石）を実施する。

また、翌日の潜水見学ツアー参加者の潜水技術の確認を行う。

13：30 出港　16：00 帰港

港（海底遺跡は数分の位置にある。）



穏やかな前方湾海底遺跡

潜水準備風景（前方湾海底遺跡）

前方湾海底遺跡（下方の白線がガイドロープ）

夜：小値賀町公民館にて水中ビデオ上映会（鷹島海底遺跡、小値賀島周辺海底遺跡など）と意見交換会
20：00 ～ 21：00 を予定

（第２日）

午前と午後の２回、潜水見学ツアーを行う。（主に前方湾周辺海底遺跡）
午前：9：00 出港　潜水準備後、２チーム潜水（30 ～ 50 分程度）、浮上後、12：00 帰港。
午後：13：30 出港　潜水準備後、1 ～ 2 チーム潜水（30 ～ 50 分程度）、浮上後、16：30 帰港
見学ツアーに関するアンケート回収後、解散。

■５　見学ツアー実施後

当研究所では、この事業を一過性のイベントとしては考えていない。今後、継続して行ってこそ意義があると考える。　また、安全管理上の問題から潜水見学ツアーに参加できる人数は限られている。そのため、次の方法により参加者以外の方に提供するとともに広く意識を共有し、さらに意見の集約を図り、よりよい方法を模索したいと考えている。

①公開シンポジウム

一般の人々を対象とした「水中遺産保護と水中考古学」（仮題）と題するテーマにより公開シンポジウ

2003 年 12 月に実施した公開シンポジウムのチラシ

協会設立以来、発行を続けている NEWSLETTER

2006 年 12 月発行の研究誌「水中考古学研究」第２号

ムを福岡市で開催する。

② NEWSLETTER 発行

海底遺跡の見学ツアーに関する報告を行い、アンケート形式で意見を集約する。当研究所の Website で常時、ダウンロード可能な状態にしておく。また、希望者には印刷物を配布する。

③「水中考古学研究」第３号の刊行

水中遺産の保護と活用に関する特集を組む。「海底遺跡見学ツアー実行委員会」による事業実施報告や「海底遺跡の史跡化及び整備に関する研究会」による研究成果論文を掲載する。

④次年度（2008 年度）実施計画の策定

もう一つの候補地である芦屋沖海底遺跡について、事前予備潜水により野外ミュージアム化の適否を判断する。適当と判断された場合、芦屋沖海底遺跡の見学ツアー計画書を策定する。逆に不適当と判断した場合は、小値賀島周辺海底遺跡について再検討し、他海域でも応用できるガイダンスシステムも考案し、再度、小値賀島周辺海底遺跡で見学ツアーを実施する。

7 問題点

■１　安全管理上の問題

安全管理について最大限の注意を払わなければならないことは言うまでもない。まず見学ツアーに含まれるリスクは通常のレジャーダイビングツアーのリスクよりも客観的に低いと考えている。レジャーダイビングがダイビング自体を楽しみ、あるいは海中や海底の生物の観察等を楽しむものであるが、その楽しむ対象物が遺跡や歴史そのものである点が異なるだけでリスクが増すような要素はない。むしろ通常のレジャーダイビングでは講じていない安全対策（警戒船の配置や水中コミュニケーション手段など）を行う上、潜水資格や安全基準についてもより厳格に適用するため、安全面に関しては十分に確保されると考えている。

また、潜水海域は、水深も浅く、透明度も高い。さらに湾内に位置するため、潮流や波もない。スキューバダイビングの初心者レベルの技術で潜水できる環境であるが、初めての試みであるため、念には念を入れて潜水資格を初級者～中級者レベル以上に限定する。しかし、将来的には広く参加者を募るために、柔軟に対応できるように参加者個人の技術レベル毎に見学コースを設定できるようにしていきたい。

以下、今回の海底遺跡見学ツアーの安全基準を明記する。

①潜水見学中の安全対策として、警戒船を見学区域に常時待機させ、他の船舶に十分に注意する。
②警戒船はその船上に、国際信号機 A 旗を示す標識や形象物を掲げ、警戒員を配備する。
③海上の状況を天気予報等で事前に調べる。
④緊急事故発生時の連絡一覧表を作成する。
⑤水中スピーカーあるいはそれに代わるものにより船上と潜水者の連絡システムを確立させる。
⑥下記事項時には事業を中止あるいは内容を変更する。

風速 10m ／秒以上の時
波高 1.0m 以上の時

■2 遺跡に与える影響

現在、小値賀島の山見沖海底遺跡および前方湾海底遺跡は、周知の埋蔵文化財包蔵地である。そのための法的規制があるが、「海底遺跡の史跡化及び整備に関する研究グループ」のメンバーは長年、埋蔵文化財行政に携わってきており、その点については熟知しているので問題ない。

まず遺跡に与える影響に関しては、大きく二つの問題に分けられる。一つは今回の事業の実施そのものが与える影響、もう一つは事業実施後に生じることが想定される影響である。

一つ目の事業の実施そのものが与える影響については、発掘（掘削）等による現状変更行為は行わない。また遺物の回収などについても原則として行わない。ただし、海底で位置が安定しておらず、消失する恐れがある遺物については、その位置や発見状況の記録保存をした上で回収することはありうる。その場合、文化財保護法や遺失物法に則り、手続きされる。

二つ目の事業実施後に生じうる影響の一つは、「盗掘」問題である。これは実際に事例がある。玄界島の南西沖では唐津系の陶器が大量に発見され、福岡市教育委員会による目視調査も行われている。しかし、その後、某テレビ局の骨董品などの鑑定番組に漁師が引き揚げた陶磁器が持ち込まれ、高額の値段が付けられた。その結果、地元の漁師らによって次々と引き揚げられ、「盗掘」された経緯がある。安易な演出を行ったテレビ局の無知にも問題があるが、水中の遺物であっても陸上の遺跡と同様に「盗掘」扱いになることが周知されなかったことにも問題がある。小値賀島の場合、地元教育委員会と地元漁協の協力関係が良好であり、漁協自身がそうした行為を行わないことはもちろんのこと島外からの「盗掘者」に対しても監視を行ってくれると思う。事実、2002 年に調査を行った山見沖海底遺跡には現在も大量の陶磁器が散乱しているが、盗掘された形跡はない。そうした協力体制を考えた上でも小値賀島は野外ミュージアム化に適した海域であると考える。

アジア水中考古学研究所

〒810-0001
福岡市中央区天神４丁目 5-10
チサンマンション第２天神 1110 号

Asian Research Institute of
Underwater Archaeology

Chisan Mansion Tenjin 2
4-5-10-1110 Tenjin Chuo-ku,
Fukuoka City 810-0001 Japan
Tel.&Fax 092-725-0171
http://www.h3.dion.ne.jp/~uwarchae
kosuwa@h6.dion.ne.jp

編 集 後 記

今回の NEWSLETTER は号外である。日本財団の助成を受けて行う「海底遺跡見学会の開催と水中考古学の推進」事業の構想企画書と事業計画書を兼ねている。

海底遺跡の見学ツアーは以前より会員より要望があった企画である。広く海底遺跡の存在と意義を認識して頂くよい機会としたい。

「当たり前の考古学を水中で行いたい」とある会員が言っていた。陸上の遺跡では当たり前の見学会を今夏は水中でやってみたいと思う。（N）

ありがとう競艇

この「海底遺跡見学会の開催と水中考古学の推進」事業は競艇の交付金による日本財団の助成金を受けて実施します。